

「民族の歴史的偉大さ」から「詩人と思惟者の民族」へ

細川亮一

(A)「本来的な、しかし最も遠い目標、つまり存在の力の実現と形態化における民族の歴史的偉大さ。／より近い目標、つまり民族が根を張ることから、そして国家によって民族の負託を引き受けることから、民族が自己自身へ立ち返ること。／……」(GA94, 136)

(B)『『ひと』がもはや詩人と思惟者の『民族』であろうとしないこと、あるいは単にいつでも詩人と思惟者の『民族』でもであろうとすることは、そのうちで破壊する力が初めて一緒になって地歩を固め拡大する、あの近代的本質に対して人が留保なしに『然り』を言おうとしていることを証明していないだろうか。ドイツ人があの自己否認によって、これまでドイツ人に仕掛けられた最も隠され最も確かな罠に陥ったとしたら、どうだろうか。人が『文化政策として』映画俳優やピアニストやあらゆる種類の文筆家を後援することによって、あの詩作的—思惟的な本質を放棄することがとても簡単であるのだからなおさらである」(GA94, 501)。

「民族という問題——『黒ノート』が問いかけるもの」が「統一テーマ」なので、『黒いノート』から「民族という問題」に関して重要であると私が思っている二つのテキストを引用した。(A)(B)を手がかりにして、『黒いノート』が問いかける「民族という問題」を考えてみたい。

(A)は「民族の偉大さ」を、そして(B)は「詩人と思惟者の民族」を語っている。(A)からは、ハイデガーがナチズムのうちに見たもの、期待したものを読み取ることができる。しかし「民族の歴史的偉大さ」とは何か。(B)はドイツ人が「詩人と思惟者の民族」であろうとするかどうかを重大視しているが、何故これほど「詩人と思惟者の民族」にこだわるのだろうか。そもそも(A)と(B)はいかなる関係にあるのか。(A)(B)の背景に、そして『黒いノート』三巻すべての背景に、「ハイデガーとナチズム」という問題がある。この背景を無視して、『黒いノート』三巻を読むことはできない。それ故(A)(B)を読み解くためには、まず「ハイデガーとナチズム」問題へアプローチするための基本的な解釈地平を確保しなければならない。『黒いノート』第二巻には、「ハイデガーとナチズム」問題の試金石となるテキストが見出される。

(C)「純粋に『形而上学的に』(つまり存在史的に)考えると、1930-1934年に私はナチズムを別の始元への移行の可能性として捉え、ナチズムにこの意味を与えた。それによってこの『運動』はその本来的な力と内的な不可欠さにおいて、そしてその固有の偉大さ付与と偉大さのあり方において、誤認され過小に評価された。ここではむしろ、しかもファシズムにおけるよりはるかに深い仕方で——つまり包括的で決定的な仕方で、近代の完成が開始する。……／ナチズムの本質と歴史的な本質力についての以前の錯誤への完全な洞察から、ナチズムの肯定の必然性が初めて、しかも思惟的な根拠から明らかとなった」(GA95, 408)。

私にとってこの(C)は『黒いノート』のなかで最も重要なテキストであるが、発表はまず(C)を読み解くことを試みる(一)。それによって獲得された解釈地平に基づいて初めて(A)(B)を読むことができるだろう(二、三)。

(A)の「民族の歴史的偉大さ」を与えるのは、創造者の三位一体（詩人－思惟者－国家創造者）である（二）。(B)の「詩人と思惟者の民族」において、三位一体の国家創造者が抜け落ち、詩人と思惟者だけが残っている。国家創造者が消え去ることのうちに、ナチズムからハイデガーが離反したことを読み取ることができる（三）。「民族の歴史的偉大さ」から「詩人と思惟者の民族」へ」という発表の表題は、この離反を示唆している。しかし「詩人と思惟者」と「民族」は(A)(B)に共通である。ではハイデガーが「詩人と思惟者」、そして「民族」を問い始めたのはいつであり、いかにしてであるのか（四、五）。この問いによって、1929／30年冬学期講義へ導かれる。そしてこの講義において「始元－終末－別の始元」という構図が成立している（六）。(A)(B)の射程、そして(C)の意味を捉えるためにも1929／30年冬学期講義にまで遡らねばならない。この講義のうちにナチズムへの最初の一步を見ることができよう。発表は以下のようなになる。

- 一 「別の始元への移行の可能性」から「近代の完成が開始する」へ
- 二 民族の歴史的偉大さ
- 三 詩人と思惟者の民族
- 四 詩人と思惟者（ヘルダーリンとニーチェ）
- 五 我々とは誰か
- 六 偉大な者たちの最後の者——フリードリッヒ・ニーチェ